

## 保育計画成果報告書

法人名	道徳たけの子共同保育所運営委員会
施設名	道徳たけの子保育室
報告者（役職）	渡邊 里絵（保育責任者）
住所・連絡先	愛知県名古屋市南区六条町三丁目9番地
	☎ 052-692-2207
	E-mail qqxf7es9k@kind.ocn.ne.jp

○タイトル（保育計画）

ひとりひとりの子どもに合った感性と身体の育ちを豊かにはぐくむ

○主な助成備品

積み木、サーキットブロック

### 1. 保育計画策定の目的

道徳たけの子保育室は、40年以上続いた共同保育所の精神を受け継いだ保育所で2年前に国の制度移行に伴い小規模保育事業の保育室となりました。共同保育所時代からのおもちゃは古くなっていたものも多く、自分で想像して自ら面白さを発見する力を育てるおもちゃの必要性も感じていた。

子どもたちはおもちゃを通じて視覚的な刺激と感覚的な刺激を受けます。そのなかで、大人や友だちと関わることで、感覚的な刺激を豊かにして、遊びのイメージと身体の動きのイメージを育てていくことを目的とした。

あそびの中のなかで得た経験や出来たものに満足して、またイメージを膨らませることができ、大人との関わりのなかで立ち直りの力やイメージする力を育てる「具体物」として、「積み木」を購入した。

また、発想しながら身体を動かすことで育つ友だちと共感する力や、身体を動かし自分で考える経験を通じて感性と身体の統合ができる力を育てる「具体物」として「サーキットブロック」を購入した。

### 2. 具体的な実施内容

<積み木>

子どもたちが好きなときに自由に遊べるように、また、月齢や年齢に応じて、自分なりの遊び方を楽しめるようにおもちゃ棚に積み木を設定した。

#### <サーキットブロック>

雨天時に室内で身体を動かすことを目的に、主活動として定期的に取り組んできた。

0歳児～1歳児前半では「斜面あそび」「トンネルあそび」など取り組んだ。

1歳児後半から2歳児では、安全に配慮しながら「よじのぼり」「跳ねたり跳んだり」「バランス渡り」などが楽しめるように、サーキットブロックを色々な組みあわせにして取り組んだ。サーキットブロックの組み合わせは大人が発想しながら組み立て、子どもたちとも一緒に準備を行った。

### 3. その成果と評価

#### <積み木>

1歳児クラスでは、「積み上げる」ことが楽しくて大人と共感しながら遊んできた。後半になってくると「高く積みたい」気持ちがでてきて、崩れないように慎重に手指を動かし集中して遊んでいた。頑張ってる姿を大人が見守ることで、崩れたりしても子どもの気持ちに共感でき、失敗しても自分で立ち直り「高く積む」という目的に向かって、何度も挑戦する姿がみられた。

2歳児クラスでは保育士が創っている形を真似をして、慎重に手指を動かし形を創っていく姿が見られた。友だちと遊ぶなかでは「高く積む」ということを一緒に楽しむ姿があり、失敗しても「もう1回やろう」「頑張ろう」と気持ちを共有しながら遊んでいました。友だちとの関わりのなかで「積み木」を真ん中につながる姿が見られた。



### <サーキットブロック>

0歳児後半～1歳児後半では、身体を動かしながら大人や友だちと「おもしろいね」と共感することを大切に取り組んできた。トンネルではくぐったりするだけではなく、「まてまてあそび」のように追いかっけこしたり、「いないいないば～」と子ども同士笑い合う遊びが展開されてきた。斜面のぼりはハイハイ時期から取り組み、斜面を足の親指裏をしっかり使って登ることで、楽しく遊びながらも丈夫な身体づくりができた。1歳児後半では「怖い」気持ちもでてきて身体の使い方を少しずつ考えながら取り組む姿も見られた。



2歳児は身体を動かして遊ぶことが大好きで、雨天の日でも身体を思いっきり動かして遊べることに期待する姿がみられた。最初の頃は、楽しさが先立ち周りを見れずに友だちとぶつかったり、身体の動きに危なさを感じられた。しかし、遊びを重ねるなかで友だちの様子を見たり、危なくないように身体の使い方を考えながら遊ぶ姿に変わってきた。そこから、「いっしょに～しよう」とジャンプしたり、よじ登ったり、橋渡りをしたりする姿が見られるようになった。



#### 4. 今後の課題と展望

##### <積み木>

今までの子どもの遊ぶ姿を見ていると、月齢によって遊び方が違う。「上に積む」から「並べる」そして大人の真似をして「徐々に複雑に」遊んでいる。保育として、子どものかもし出すイメージを大切にしながら、0歳・1歳・2歳児の取り組みをまとめ、一人一人の子どもに合った積み木の遊び方の基本を確立していく。積み木を通して、大人との関係のなかで安心する心・楽しく遊べる力が育つようにしていきたいと考えている。

##### <サーキットブロック>

サーキットブロックを使用して遊ぶ中で、0歳児の「いないいないば。」や1歳児の「わたしがさき、ぼくがさき〜!」、2歳児の「いっしょにやる〜!」と大人との関わりから友達との関わりへと社会性が広がっている姿があり、使用の仕方によつての成果が確認できた。社会性の力の成長と共に今後は、一人一人の身体と思いの統合（感覚統合）に注目して、どんな組み合わせで取り組んだらどんな成果がでるか、保育を実践していきたいと考えている。乳児が対象の小さな保育所の特徴を生かして、サーキットブロックを使用した安全で安心できる運動的（身体的）保育を進めていきたいと思っている。

以上